

帰らざるジャケット

あの日、注文した兵士は今日もこなかった。



「今度、いつ戻るか……」と言い置いて店を出た男たちの何人かは、二度と帰ってこなかった。帰れなかった理由は永遠に失われ、壁にはジャケットが残る。かつて「コザ」と呼ばれた町の刺しゅう店の壁には、ベトナム戦争時代から、いやそれより前の戦争の時代から、そして今もさらに聞かれる物語なのだった。そのたびに、あの「ノーリタン、ノーリタン」と甘いかすれ声が、耳にこだまのように繰り返す。兵士が注文主である限り、引き取り手が帰ってこない「ノーリタンジャケット」はできてしまう。それでも兵士の帰還を信じるかのように、基地の町の刺しゅう店の壁では、あの日、ジャケットが待ち続けている。

Photo/Kesaharu Imai



沖縄県中部の金武町に島崎刺繍店がある。店を営む島崎達彦さんは若き日、コザの刺しゅう店で修業した。金武町にはアメリカ海兵隊が駐屯するキャンプハンセンがある。店はその基地のゲート1前にある。

Photo/Taku Mizuno

コザの刺しゅう原画たち

河村喜代子

コザの街に、降り積もるようにして残されてきた刺しゅう原画。原画、型紙としての役目がおわる目目の前から消える。だが、捨てられてしまうわけではない。コザの街にある刺しゅう店ではそれらをすべて保管している。刺しゅう原画とは、仕事の記録であり、店の誇りそのもの。同時にそれらは、コザの街が過ごしてきた時間の伝言者でもある。

2018年から19年にかけて、沖縄市で続いている刺しゅう店を訪れる機会があった。主目的は、もちろん刺しゅうそのものである。行った先々の店では、仕事の最中であるにも関わらず、協力的な対応をいただいていた。心が温かかった。どの店を去る時も、なにかしらに気がなっていた。しばらく時間が過ぎたところで、気を取られたものと理由が分かった。刺しゅうの原画だ。原画といってもいい刺しゅうをする際の、図柄の配置を大まかに示している図もあった。なかには、作業が終わった印なのだろうが、大きなバツ印が付された図があった。このバツ印はなかでも強く印象に残っていた。

刺しゅう用の原画、あるいはレイアウト図は、注文主が持ち込むケースがまず最初にある。つぎに、刺しゅう店側が、客が望む刺しゅう

の絵柄を聞き取って制作するものがある。ある時など、日本人形を持つてきて、その人形を刺しゅうにして欲しいと頼まれたこともあった。そうだと、そうなるかと、デッサンして絵におこす必要が出てくる。これをする方法として、ムギストアの麦倉氏がノウハウを説明してくれているので、いつか、紹介したい。

刺しゅう用の原画は、布地に図案を転写するための型紙をおこすために使われる。なかには原画は残っており、型紙だけというものもある。あるいは持ち込まれたのは切手サイズの小さな写真で、それを絵におこしたものを原画としている例もあった。まだコピー機が普及していない時期なので、図の拡大や縮小はすべて、手作業である。刺しゅうをする前段階の準備として、刺しゅう師が行った。こうした刺しゅう原画が扱って

いるテーマは、アメリカの文化そのもの。それらを二つでも多く、収録したいと考えた。そこには、刺しゅう原画が、「ペーパーアーカイブス」そのものだとの直観があったからだ。原画は、刺しゅうをして用が済んだら、取り捨ててしまうのかと驚いたのだが、そんなことはなかった。保管のやり方は、店によって、刺しゅう師によってそれぞれだったが、どこでもちゃんととってある。たとえバツ印を付けた原画であっても、残されていただけだし。

「ペーパーアーカイブス」とは、ニューヨークで古書店をしている人から聞いた言葉だ。その人は、本になつたものだけが、知恵の格納庫なのではない。たとえ包装紙だろうと、どんな紙片であろうと、スベーパーに使われた新聞紙でも、集めて分類すると、別の新しい発見につながるという趣旨の話をし

た。実際、そうした見方には、うなずける覚えが多々あったので、以後、「ペーパーアーカイブス」探しは、常時、頭に置いておくべきテーマになっていた。そして、コザの刺しゅう師が、ファイルを開いて、あるいは引き出しから、刺しゅうの原画を取り出して、目の前に並べて見せてくれた。それらのあるものは、有名なアメリカンキャラクターであった。あるいはデフォルメが効いたホットロッドのイラストだったりといういろいろだった。時代背景が色濃く反映された原画もあった。ポリテリカリーコレクトではない表現もある。消毒するわけにも、なかったことにするわけにもできない。それも歴史だ。

刺しゅうの注文主が、アメリカ兵が大半だったので、ミリタリー色の強い内容であるのはいうまでもない。

EMBROIDERY

玉橋 刺しゅう店



刺しゅうの店 沖縄市

玉橋刺しゅう店

朝の9時には中央パークアベニューに面したガラス戸が開いている。店内にはジャケットが背中を見せて並んでいる。しかも上下2段である。猛々しく咆哮するドラゴンやタイガーはもちろんのこと米軍のウイングマークやインシグニア系デザインまでなんでもござれである。

横振りミシンの脇には大きな刺しゅう枠がかけ、店の刺しゅうの力を物語っている。





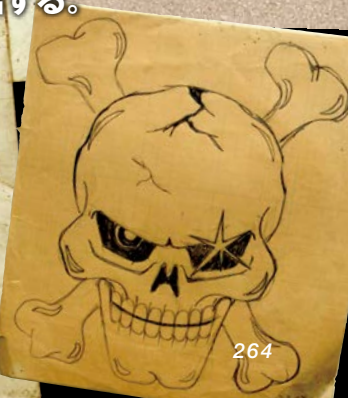
島崎刺繍店

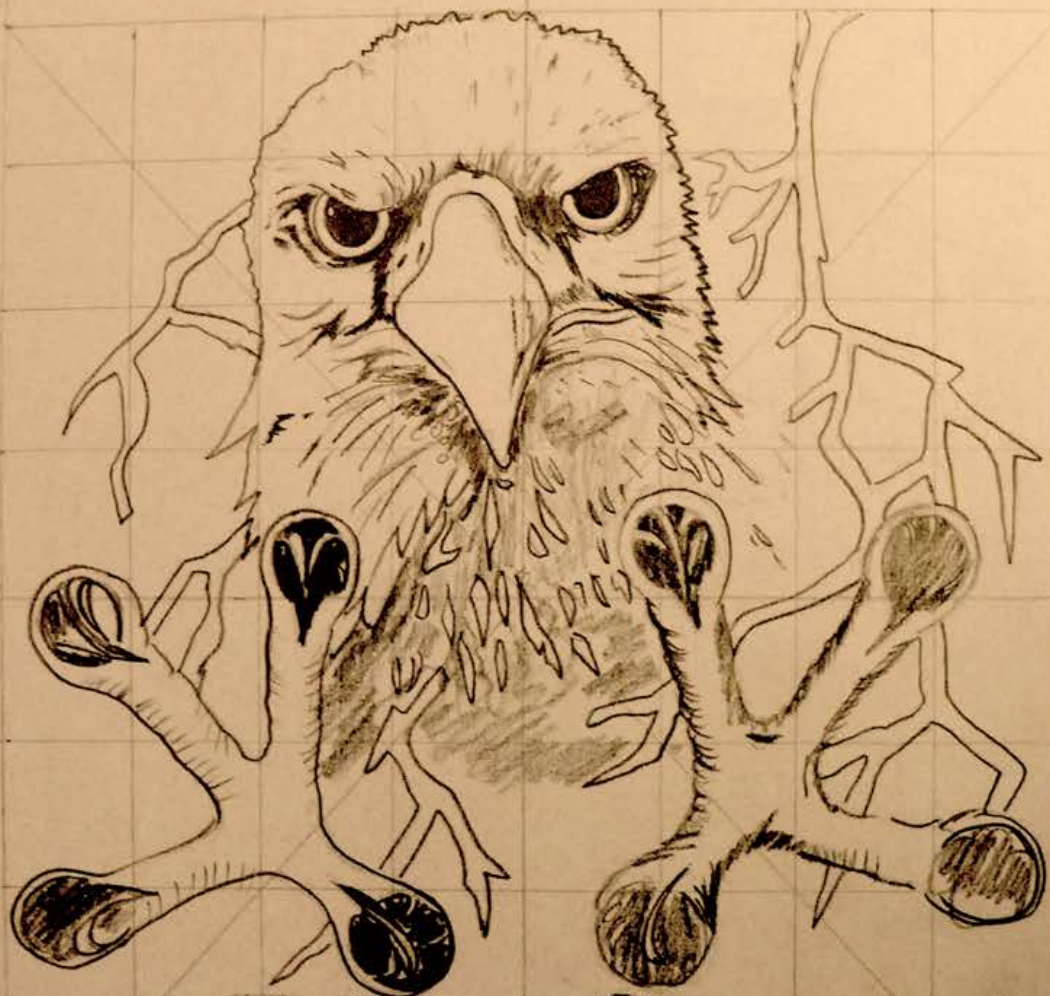
TEL:968-4892

刺しゅうの店 沖縄市

島崎刺繍店

「基地があるところに刺しゅうの店あり」の約束は生きていた。米海兵隊が駐屯するキャンプ ハンセンがある沖縄中部の町、金武には基地のゲート1からすぐのところにある島崎刺繍店がある。店の代表者である島崎達弘氏は見習い時代をコザの刺しゅう店で過ごした。圧巻は迫力あるデッサンの数々で、それが刺しゅうの勢いに直結する。





Marines

